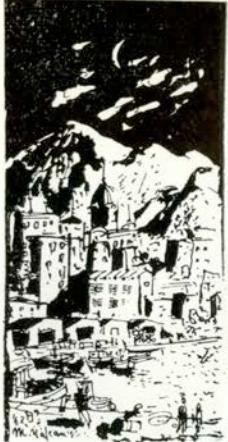


神戸とエトランゼ



# いつまでもあかるく

——シルマー氏を訪ねて——

陳え・中舜西勝

熊内にあるO・W・シルマーさんのお宅は、日本家屋である。畳にすわって、ビールをご馳走になりながら、お話をうかがう。

「ぼくは味噌汁が好きなんだけど、ワイフがなかなか作ってくれんです」

うた子夫人をかえりみて、あざやかな神戸弁でシルマーさんは言った。その微笑にはなんともいえぬミリキがある。

ドイツの新薬『カルドピン』の新聞広告に、逞しく、そしてやさしいドイツ人の顔が大きく写っているのを、おぼえておられる方がいるだろう。それがシルマーさんだ。

「タンレンントづいてますねん」

カルドピンのほか、シデンの広告写真にも顔を貸している。ラジオの「めおと善哉」に出たこともあるし、テレビでダイマル・ラケットや森光子と共に演じたこともある。そのとき森光子はシルマーさんの妹で「モーリン」という役だった。

本職はドイツ領事館員。一九一五年、神戸で生れたシルマーさんは、純粋の青い目の神戸っ子である。山本通りのカソリック教会の角っこ（現在は教会の構内になつてゐる）の家で育つた。どちらかといえば下町の環境である。だから、おつとり育つたのではない。十一才でドイツに帰国するまで、シルマーさんの少年時代はケンカに

あけ暮れた。

三人兄弟の末っ子に生れたシルマーさんは、御両親にとってはいさか期待はそれの子だった。というのは、男の子が二人づついたので、つぎは女の子が望まれていたのである。三人目も男だったが、せめて大きくなるまで赤いオベベを着せ、女の子として可愛がろうといふことになつたらしい。



写真は左よりシルマー氏と陳舜臣氏（シルマー邸で）

「これがぼくですよ」  
アルバムの写真を出してシルマーさんは言う。氏の指は、スカートをはいた可愛いおかっぱの女の子をさしてゐる。

「へえ？」

私は思わず写真から目をあげて、シルマーさんを見る。ドイツ人のあいだでもおそらく長身のほうであろう。筋肉がしまって、ヘビイ級のボクサーのようなシルマーさんの幼年時代が、この愛くるしいおかげで少女性であろうとは。……

しかしこの女装のガキ大将は、北野町や山本通りをあはれまわった。敵が多数だと路地に相手を誘いこんだ。多人数であつても、狭い路地では一対一の対決しかできない。つまり各個撃破ができるわけで、なかなかの戦術家だったようだ。

幸福な少年時代だったが、十一才のときシルマーさんは母国で教育を受けるために神戸を去つた。そして帰国早々、お父さんが神戸で亡くなつたという悲しいしらせをうけた。シルマーさんのお父さんは日本人のあいだでは「八番さん」と通つていた。むかし居留地や外人住宅地では、車夫などが外人の名前をおぼえられないのでもっぱら屋敷番で呼んでいたのだ。外人なまでは、「神戸の大仏さん」と言われていた。ウエストが二・五メートルという巨漢であった。一人乗りの人力車にはのれなかつたし、初期の市電のボロ車輛は、大仏さんがのれるとギュッときしんで、乗客が青くなつたそうだ。

シルマーさんは少年期の後半と青年時代初期の十年間を母国のドイツで学生生活を送つた。この学生生活で、シルマーさんは将来の進路を変更せねばならぬ不幸に遭遇した。建築を勉強していたのだが、実習のとき誤つて右手を電気鋸にまきこまれて、指を二本切断されたのだ。指がなくては設計図を引くことは不可能である。建築技師をあきらめてシルマーさんは二十一才で神戸に戻つた。そして商館につとめた。

だが、シルマーさんは朗らかさを失わなかった。どんな不幸に見舞われても、どこまでもあかるいのである。くらい駄はミジンもない。今までもジョークにかけて誰にもヒケはとらない。エイプリル・フールになると、シルマーさんのまわりの人たちは極度に警戒する。それで、まんまとしてやられるのだそうだ。

またシルマーさんは漫才がお好きである。ラジオで漫才のあるときは、万難を排してくようにするという。

漫才の笑わせ方と間のとり方などが、ジョーク製造人シリマーさんは参考になるのである。いまシルマーさんは大阪のドイツ総領事館につとめておられるが、昼休みの領事館で漫才の声を耳にされる人があるかもしれない。それはシルマーさんの携帯ラジオから流れているのである。

昭和二十年。終戦もなく、シルマーさんの運命の右手にもういちど不幸が襲いかかった。神有電車（神戸電鉄）の顛覆事故にあって右腕をつぶされてしまつたのである。それから十八年のあいだ、なんども入院手術してやつと腕らしい形はとり戻したものの、まだ手は肩のへんまでしかあがらない。そして手首からさきはだらりと垂れたまま、もちあがらない。近くまた整形手術を受けられるという。

かさなる不運にも、シルマーさんの天性の陽気はゆるぎもしなかつた。ジョーク製造のはかに、切手のコレクションという趣味がある。このほうは本格的なもので、かつて個展をひらいたこともある。私など素人にはよくわからないが、一冊のアルバムの時価が、「まあ十万円くらいかな」とのこと。それが數十冊もならんでいるから壯觀である。

切手から話題をかえて、

「奥さんとのそもそもなれそめは？」  
とたずねてみた。シルマーさんはニヤニヤ笑っている

奥さんのほうが悪びれずに、

「結婚したのは昭和二十五年でした」

なれそめは？ 場所は大阪駅。神戸から通勤していたシリマーさんは快速（当時の急行電車）から下車すると毎に同じホームで上り普通電車を待つてお嬢さんがいた。シリマーさんはそのお嬢さんに心をひかれ、ついにある日、思い切ってお茶に誘つた。

例のお嬢さんはギクリとした表情で、

「ダメですわ、今日は……」

「今日がダメやつたら、明日はいいんですね」

その場のがれに「今日はダメ」と言つたが、「明日は」と脇みこまれると、もう逃げる言葉がない。やむなうなすくが、つきの日、約束の場所にそのお嬢さんは友だちと一しょにあらわれた。「明日は」への仕返しである。デートを承知したものの、「一人で」とは言わなかつたのだから。

こうして三人デートがはしまつた。いつでも三人で、二人になつたことがない。シリマーさんは不満だった。小声で「いい加減にあのジャマモノさんを連れてこないで下さい」と囁くが、そのたびに「いけませんわ」とやられる。やつと半年たつて念願の二人きりのデートがかなえられることになった。

そのお嬢さんが現在のシリマー夫人であるのはいうまでもない。当時は住友化学につとめ、毎にち大阪駅から吹田へ通つていたのをシリマーさんに見染められたのである。結婚してから奥さんは里帰りしても、いちども泊つたことはない。ダンナさんのそばでなければ夜もあけないのである。世にもむつまじい夫婦とお見受けした。

青い目の外人といえば、豪華なホテルのロビーにくつろいだり、異人館の奥まった居間のソファーにからだを埋め、足もとの緋の絨氈には珍種の愛玩犬がうずくまつている。一といった情景をわれわれは想像しがちであるが、シリマーさんはそんなふうに日本の庶民の世界から隔離された所で生活しているのではない。つつましい日本家屋の脇の間で生活している。庶民のにおいがそこにある。日本の生活に溶けこんでいる、いや、溶けこむ

といった意識さえまったくもたずく暮しているといえるのだ。碧眼の下町っ子。それがシルマーさんのタイトルである。

シルマーさんのあかるさは、そのまま神戸のあかるさである。神戸の町だって戦争で傷つき、いろんな苦難を経験してきた。それでもあかるいのだ。シルマーさんも右手にまつわる二度の不運にもめげず、底ぬけにあかるい。

奥さんが切手の整理をしているシルマーさんのうしろの戸棚を開け、そのまま台所のほうへ行こうとする。



シルマーさんはすました顔で切手の分類をつづける。油断もスキもない。いつ一ぱいくわされるかわかつたものではない。

「ひどいひと！」

奥さんはダンナさんの背中を打つが、ボクサーのようないシルマーさんには通じない。

このほがらかなやりとりのなかに、神戸の風土があると私は思う。神戸の町も受けた傷をかくし、それをいやしながら、陰翳のないあかるさをもちつづけてきたの帰りに玄関まで送つて下さったシルマーさんは、鴨居のところでひよいとかがんだ。長身のシルマーさんは日本家屋では、うつかりすると頭を打つてしまうのだ。部屋を出るときは、どうしても頭を下ねばならない。シルマーさんと日本、そこになにかびたりしない点があるとすれば、それはこの家屋構造のサイズだけであろう。

(作家)

「しめてくれよ。風がはいって切手がとんでもしまうやないか」

「あら、ごめんなさい」

奥さんが戻ってきて戸をしめる。が、なんだかフにおちない表情をした。やがて、

「あつ、やられたわ！」

窓を開け放したのならともかく、戸棚の戸を開けて風がはいってくるわけはない。奥さんはまたかつがれたのである。

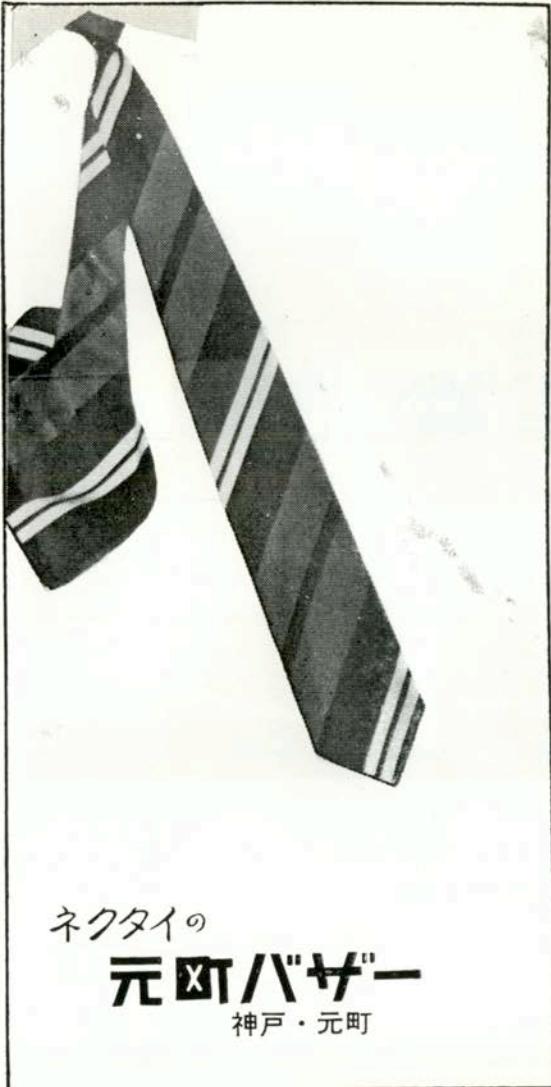
初夏を装う美しい帽子



婦人帽子

マキシン

神戸・トアロード TEL (3) 6671-3  
東京・銀座 3-2 TEL (535) 5041



ネクタイの  
**元町バザー**  
神戸・元町



特選  
ハンドバック  
専門の店

ジラサ

元町2丁目・③0813

Lather Newton



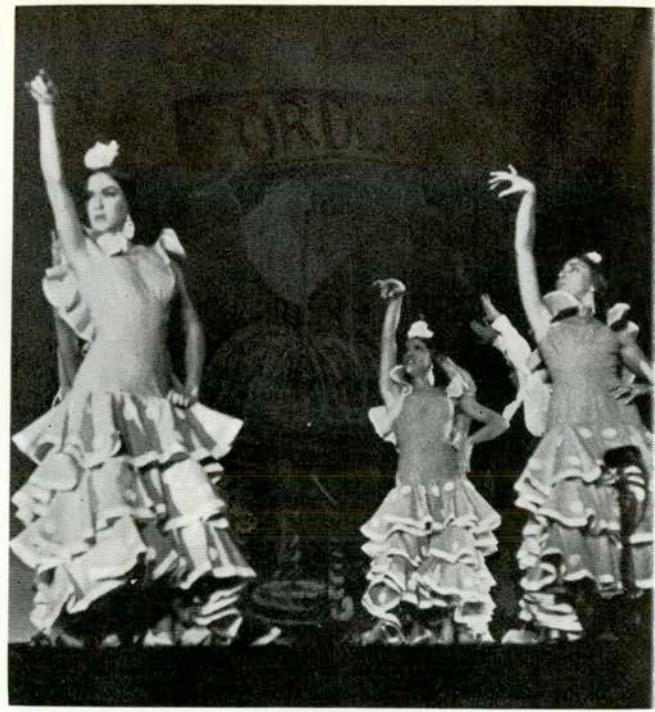
美しさを創る…

エスター・ニュートン

トア・ロード③1818

唄や踊りが民族や国家を象徴するのではいる。それと同じ意味で、日本では「フラメンコ」はスペインである。その中、南スペイン（アンダルシア地方）の「フラメンコ舞踊」がスペイン舞踊を代表する花形である。この民族舞踊は、昔東方から渡来し、発達したジプシー族によつて伝えられた。東洋的な、エスプリを持った精神的もので、極めて伝統的で、民族の魂と性格を描き出した。その踊りの中には、日本人を魅了され、そしてそのたびに兄弟の血の通いを感じる舞踊である。

私の現在のところは、未熟乍ら舞台で演じ、そのため私は現れる舞踊家に心から感謝せざるはいられません。これまで、自分自身の喜びを感じる時、ガス・ヒメネスの両名舞踊家に心から感謝せざるはいられません。それ以来映画に、グレコ・アントニオ、最近来日したアレグリアス舞踊団、ピラール・ロペス舞踊団など、次々に新作品、スパニッシュ・バレエならびに「フラメンコ舞踊」を見ました。私はその情熱的



## 私の好きなスター

### 情熱の「フラメンコ」

清水安子  
(フラメンコ舞踊家)

した。特に、アレグリアス舞踊団の方々とは親しく語り合うことが出来て、本当につかしい、兄弟になつた感じがいたしました。だから、「私の好きなスター」は個人その人を指すのでなく、南スペイン人その民族の情緒と性格、そのためには哀愁と情熱が、そのためにアレグリアス舞踊団こうした著名な舞踊家たちの舞踊手あからく醸し出される奔放気は、一つであります。「私たちはそれを愛するし、それが私たちの好きなスター」でもある。(写真はアレグリアス舞踊団)

その踊りを見る時  
恋の情熱を！  
恋の哀愁を！

アレグリアス舞踊団  
の私たちは、それを愛するし、それが私たちの好きなスターでもある。  
(写真はアレグリアス舞踊団)

# 新らしい革袋に

赤根和生　え・青木一夫

国鉄三宮駅の南側に青い海を背に、緑濃い六甲山に向かって傲然と立ちはだかるあの醜悪なまでに写実的なバカデカイ人工の富士山は、風光明媚を誇る神戸の玄関口にいいようのない軋りに充ちた違和感を齎らしているが、あれは恐らく神戸で△最も丑んだ風景△のひとつであろう。写真の原画をタイル・モザイクに移すということとは技術的に生易いことではないが、仕事の珍らしさや困難はそのまゝ決して誇りとはならない。あれ丈よい条件のところに苦心して陳腐なものもつてくるのは「新らしい革袋に古い酒を盛る」類の、技術の浪費にすぎないモザイク独特の表現力を活かして洋々とダイナミックなミナト神戸の美を象徴する壁画が現出したならば、周囲がそのまま額縁になりオリジナル芸術になり得たろうし、より大きな意味のP・Rの実を広告主にも齎らしたことだろう。恐らく神戸市にはあゝしたせつかちで独善的な商業広告を阻止する条令もそんな夢を実現する財源もなかつたろうが、あの広告こそ地方文化を毒し、均一化して丁う「力」と「無知」の象徴であろう。「オオマ

タココニモマウント・フジ々」という外国観光客の呟やきを聞いたら六甲山も苦笑するだろう。しかし、市民は苦笑では済まされない筈である。駅前は市民の顔でありメントでぬられた顔の泥は洗い落ししようもない汚点を残し続ける。

駅前、それは戦後文化の発祥地であった。駅という駅の前に出来たマーケットでござぱりした下着を工面し食料を仕入れ、一杯のカストリから自由への、民主主義への論議が花開いた。間もなく駅弁が復活し、そして駅弁のあるところ、無数の「駅弁大学」が誕生した。これらから地方文化の画一化が始まつた。文化の二元性、多元性は日本という風土の大きな特性であるが、その雑多な様相の中から大きなエネルギーが産れつゝあるのは事実である。そして、マスコミの発達とその同時性は文化的な落差を減じ、地方文化のレベルをあげるのを助長したのも事実であるが、同時に依然として中央集権的、權威主義的な社会形態と、はき違えた(ローカル)性へのコンプレックスとが入混つて、地方文化が小間物屋的な小さ

制されるがわれわれの内にある。中央、又は他都市にあるものは何でも移入したがる悪癖がそれである。

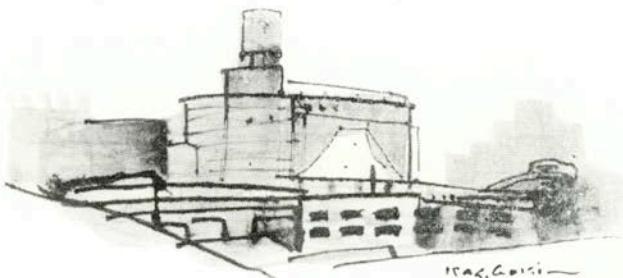
例えば昨年の八兵庫県芸術祭▽である。内容は二番煎

じのお粗末で独自性は皆目みられないあのようない官製のお祭りからは何ものも産れはない。われわれの周囲にはお祭りが多くて、クリスマスのバカ騒ぎのあと一週間も経たずにお正月も祝わなければならぬ忙しさなのである。無意味なお祭りは是以上作らないでほしい。とは云え、先頃の八美術家祭▽は美術家達自身の中から産れて来たお祭りで、この流派を超えた親睦から今後産れてくるものを期待する意味でひとつの意義をもつものといえよう。

文字通りのお祭りに終つて了つたようだが、われわれの周囲から八重んだ風景▽を抹殺し、新らしい美を創るエネルギー源となるような運動の展開を今後に期待したいものである。例えば今回の集いも、漸やく具体的な発言を見つゝある八美術館設置▽問題などとは無縁な処にあげられた花火のような感がするが、お役所に予算がないならば、たとえさゝやかでも自分達の絵も抛出し合つてもういう先ず美術家自身の中からの動機すけの姿勢を見せてほしい。われわれ市民もたすきがけで街頭募金に立つ位の用意はあるのである。

八近代美術館▽乃至はそれに類したギャラリーの設置は緊急の問題になりつゝある。たゞ前述のように単なるものねだりの形で設置を急いで、駅弁のトンカツのように食い足りないものが永久化されることは取返しがつかない。今迄の発言はすべて「作つて下さい」「考えてみましよう」という個々のそれ違いに終つていてるように見える。せめて、一日も早く広く学識経験者をも入れた「学問対策委員会」を設けてその規模なり時期なりを総意によつて充分に検討してほしいものである。われわれの視覚は馴れ易いものである。至んだ風景への馴れから駅弁文化はぬくぬくと育つだろう。新らしい革袋に新らしい酒を盛つてこそ新らしい地方文化は独自の芳醇さを醸し出すのである。

な完成体へと危険な傾斜を続いているのも事実である。こうした中央の「雑型」的な風土からは地方文化の新しいエネルギーは決して産れはしない。日本文化全体の多元性を地方文化にそのままおきかえたところで文化的エネルギーとはならないのである。今日の地方文化は、丁度、白米に配するに、フライに天ぶら、サラダに漬物といった雑多なバラエティに富みながらその実大して栄養にもならない、所詮間に合せの食事でしかない「駅弁」にも似たものになりつつある。名づけて八駅弁文化▽とても云おうか。この駅弁文化を助長する因は外からも強



1505. Goto

# すてきなお嬢さん こんにちわ！

きく人・岡部伊都子（彫刻家・二紀会）

話す人・新谷沢子（彫刻家・二紀会）

五月も近い陽はまばゆいほどで、新谷さんの家庭の庭も緑が美しく、その庭には、彫刻品があちこちに並べられていて楽しい。

新谷沢子さんは、女流彫刻家として彫刻に夢と若さを打こんでいらっしゃる、颯爽としたお嬢さんで、健康な明るい感じの人です。

新谷さんは神戸っ子には馴染深い、彫刻家ご一家、澤子さんの理想の男性であるお父さんが新谷秀雄さんです。お兄さんの新谷裕紀さんと沢子さんは、仲のいい兄妹で、コンビで展覧会を開かれるのも四回目とか。

岡部 「新谷さんはお生れになった頃からずっと、この辺り（中山手通）にお住いなんですか」

新谷 「小学校の頃、すこし田舎で過しましたが殆ど神戸です」

岡部 「はじめてご自分で物を創つて見ようかなと思われたのは、おちいさい頃なんでしょうか」

新谷 「いいえ、高校生の頃で、学校の進学指導が本格的になつた、三年生の夏ごろから、この道を選んでみようと思ったんです。」

その頃、兄が金沢美大へ行つていましたしね、さかんに制作していましたので刺激されまして……」

岡部 「お父さまも、お兄さまも彫刻をなさつているわけなんですけれども、新谷さんに直接、影響の大きかつたのは、やはりお兄さまでしょうね、幾つ違いますか」

新谷 「二ヶ違います。彫刻をはじめたのはやはり環境が左右したんだしようね」

岡部 「お生れになつてからズツとですものね。お父さまやお兄さまのお仕事で、沢子さんがアッと思われるような感動を覚えられた、印象をお持ちになつたことはあります。目を見たというか、心を振り動かされたというようなな……」

新谷 「父などが、個展をひらいたり、作品を制作した時には、やはり、そんな感じは受けました」

岡部 「沢子さんは、高校生のころに美大を目指された訳ですけれども、美大にはいる為にはどういう用意が必要なんでしょう」

新谷 「デッサンとか粘土の使い方なんかは家でやっていました」

岡部 「美大の審査というのはやはりそういう、実技も必要なんですか……」

新谷 「そうですね。入学試験は、実技と学科の平均点ということなんだそうです」

方が魅力があるんです」

岡部 「土を一ひねりしてここにおいても、そこに在る  
という感じがするんですね、それを絵は線で現わすでし  
ようどうしても『重さ』を線でなかなか表現できない  
それだけにかえつて彫刻で人をうつ作品をつくるのは難  
かしいんじやないかと思いますね。」

具象的なものと抽象的なものとありますけど、同じ人  
体をテーマとなすつていらつしてもご自分なりに表現の  
仕方に変化が自然にあつただろうし、どうはいって、今  
どういうところにいらつしやるんでしようか」

新谷 「学校では人体を学んだ期間というの短かかつ  
たんです」

岡部 「やはり、デッサンからおはいりになる訳ですか」

新谷 「いいえ、抽象的な基礎になる空間構成とかそろ  
いつたものを1年間やりまして、2年生のある期間だけ  
人体をやって、学校の方針として抽象的なことやります  
でしょう、だから卒業しても写実的なものに弱く、抽象  
的なものに走っているんです。」

私の場合、完全な抽象ではないんですけども不、や  
はり写実的な勉強も充分にやりたいと思っていました」

岡部 「京都へは神戸からお通いになられたんですね。  
京都と神戸どちらがお好きですか」

新谷 「京都は京都としてのよさはありますけど、私は  
神戸の町が大好きなんです。(笑) 京都に行けばお寺を  
あちこち廻りたいと思っていたんですけど結局、あまり  
機会がなかつたんです」

岡部 「私は仕事のお蔭で仏さまを見に行く機会がある  
んですけど、一人で好きな時間を過せといわれたら多  
分そういうところには行かないでしようが——仏さまも  
人体をモデルにした彫刻ということになるんでしようけ  
どネ、体の表現のなかにその時代の思想みたいなものが  
出て来ているような気がするんです。」

時代に対する共感があつたりなかつたりで、線やら、  
ボリュームのおか方に好き嫌いが出来てくるんです。  
岡部 「私は娘のころから、絵には親しみがあったので  
すが、なかなか彫刻はわからなかつた。——この頃、展  
覧会がありましても絵もいいけれどやっぱり、彫刻の世  
界でないと言えないものの『重さ』というかそこにあると  
いう、存在の確かさというものが彫刻でないと感じられ  
ない気がしてきました」

新谷 「私も絵を書くこともあるんですが、何か彫刻の



緑の美しい新谷邸で……手前は沢子さんの彫刻  
右より岡部伊都子さん新谷沢子さん

だから、新谷さんが作つていらつしやるものは、いまの時代でないと生れないものですし、新谷さんでなくてはできないものなんですね」

新谷 「そうですね、私などは夢中でとり組んでいるだけ……」

岡部 「抽象的なものを判るだけの感覚というものが一般にはまだ熟し切っているとは言えないでしようね。お

作りになつてそう言う空しさをお感じになりませんか。生県命うつたえていても、受け取る側に理解できないというような、すれ違いというようなことがあるだろうと思うんです。私なども抽象的なものに弱くてね——（笑）それこそ感覚的に空間構成がなんとなく好きだったり、なんとなく判らなかつたりでね」

新谷 「やはり、その空しさを感じます。作つてそのものが強くうつたえているものを汲みとつてもらえるような作品をつくらなければいけないんですし、意欲的なものをもつと作りたいと思つています——私自身、まだ、完全な写実をマスターしていませんし、やはり、抽象をやつしていくも曖昧なところがあつたりして、まだまだこれからもつと勉強しなければと思います」

岡部 「新谷さんは、ほかにご趣味といえばどんなことをなさっていますの」

新谷 「写真をやつているんです。腕はたいしたことはないんですが、それに自分のアクセサリーを作つて見たくなりました」

岡部 「やはり、自分でお作りになることがお好きな訳ですね——」

新谷 「新谷さんの作品をいま、アトリエで拝見したんですけど、ほんとにダイナミックな気迫というものが強く出ていると思うんですよ」

新谷 「そうですか、よく皆さんにそう言われるんですけど、ほんとにダイナミックな気迫というものが強く出ていると思うんですよ」

岡部 「迫力があるのは、一つは線の省略がよくきてるんでしようね。

いいですね、新谷さんのようなまだお若くつて、初々しくつてあどけないようなお嬢さんが、こんな力強いお仕事をしていらっしゃる。

非常に地味な努力の積重ねの仕事だし、技法も体力が必要なシンドイお仕事なんですね。表現のためにはヤスリですり出したり、一般の人を考えられない努力なんですね」

新谷 「制作中は別に苦痛は感じません、冬に粘土をいらついても平気だし、針金で手を切つても悲しいとは思わないし、むしろ楽しいですよ」

岡部 「お仕事三昧にはいらっしゃる訳ね。制作なすつていて、どうしてもご自分の思いどおりにならない時はねありますか？」

新谷 「それは、ありますね。そういう時は、その作品から3、4日離れていて、また制作にかかると言うようになります」

岡部 「62年度には、芦屋市展で受賞、兵庫県展奨励賞二紀会展奨励賞など沢山賞をいただいていらっしゃいます——神戸市展はないんですか？」

新谷 「芦屋、加古川にあって、神戸にないんです」

岡部 「神戸は非常に沢山、美術家をかかえていらっしゃるのに残念ですね——神戸に対する、お望みを語つていただきましょうか？」

新谷 「やはりなんといっても美術館がほしいですね。京都、大阪にあるような、外国から来る美術展が展覧できるようなものがほしいですね。それに市民の憩の場として彫刻などを飾つて、楽しめるような場所があればいいんですけど、父が歐州で撮影したスライドなんか見る」と、外国には沢山あるんですね。それに兄が言つうんですけど「エチケットでは山の岩壁に柱を沢山彫刻して、またそこをくり抜いて彫刻が沢山おかれているんだから、神戸のように山の多いところは、山をデザインすればいい」といつつましたが、「奇抜だけど面白いですね」

岡部 「なるほどね、そう言う造型をして下さい。例えば市とか県とかが美術家の皆さんにお願いして、一つの山なら一つの山全体をデザインしていただければ、それが立派なものが出来るでしよう」（文責・編集部）



VIENNALINE

世界のめがねがやって來た

神戸眼鏡院

元町3・電③3112-3・0551(貿易部)



きものと細貨

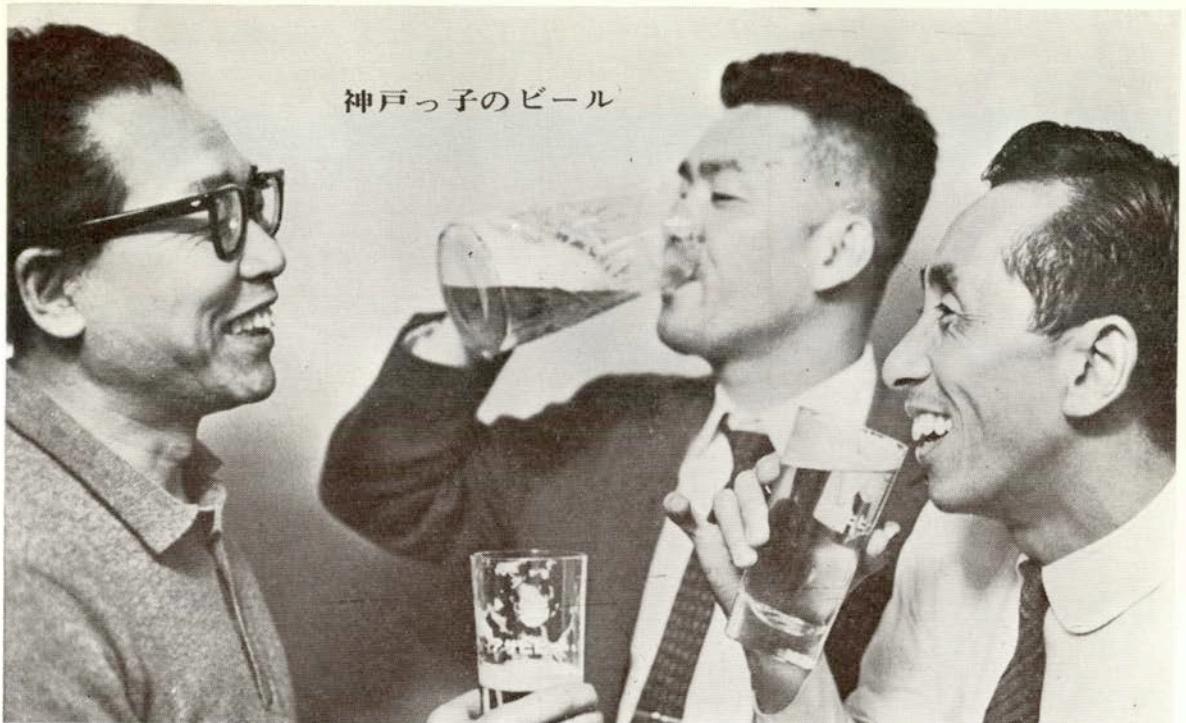
神戸

東京

	東	西
新橋店	/	/
銀座店	/	/
TEL.	T E	T E
L.L.	L L	L L
小松	(571) (571)	③③
ストア	7 7	0 8
地階	2 1	6 3
(代)	7	2 6
		9 (代)



あんざら庵



神戸っ子のビール

## (ビール通)

ビール通はエネルギー  
ッシュです。働くの  
が大好きです。1日

の汗をビールのさわ  
やかなノドごしここ  
もに消してしまいま  
す。飲むのに場所を  
選びません。時間に  
しばられません。男  
らしく裸でラッパ飲  
みだつてやります。

しかし、たつたひご  
つうるさく守ること  
があります――

ビールの銘柄、それ  
はアサヒビールです



一月四千隻の船が出入りする神戸港だが、中にたつたひとつ、第六関門沖に仮泊したまま、もう五ヶ月も動かない船がある。

運輸省航海訓練所の練習船「進徳丸」（一世）は、昨年十一月末に廃船処分となり、生れ故郷の神戸に帰ってきた。かつて神戸高等商船学校の練習船として、海外に雄飛した白鳥のようなフネ。神戸高等商船学校が創立されて間もない大正十三年に、当時の三菱神戸造船所で進水した。初めは帆船だったが、その後いまの汽船型に改めた。

はじめは帆船だったが、その後いまの汽船型に改めた。初めは帆船だったが、その後いまの汽船型に改めた。船長の顔は、妙にこわばっている。

昨年暮れ、運輸省は、進徳丸を廃船処分にしたが、ゆかり深い神戸市が昨年末にこれを払い下げてもらった。

須磨海岸に固定させて青少年ホームに利用しようというのが市のねらいだが、まだ改造費のメドがつかず、港外に放置したままというわけ——。市は「決してほおりつ放しにしてるワケじゃない」というが、まだ予算化の準備はできていない様子。須磨海浜公園の人気ものになるまでは、まだ大分時間がかかることだろう。

風波に耐え、めざす航路をいつもきまじめに進んでいた練習船進徳丸。もう太平洋を横切ることはない。Y 船長といっしょに乗ったランチは小さな船体を、三回も四回も、回った。Yさんは何もいわなかつた。そして、私たちが陸に上がつてつめたいビールを飲みほしたときたつたひとこと、彼はいった。

「フネって奴は錦を飾つて郷里に帰るつてことがないんだ一生懸命働き回つて、結局は、海底に沈むか、スクランプにされるか、うまくいくて見せ物にされるかだ。フネって奴はかわいそうなの奴だ」——。

Yさんは、目を閉じたまま、また何もいわなくなってしまった。Y船長は外航船二十年のベテラン。戦時中は輸送船を動かして何回も死ぬような危険をぐりぬけてきた人だ。その夜のYさんはめずらしくグデングデンに酔つてしまっていた。家までおくり届けた玄関先で、まだYさんはあやしげな口調でつぶやいていた。

「進徳の奴はかわいそうだ……」と。

（新聞記者）

# 孤獨な船

伊達俊太郎



先日、仲好しのY船長とランチで神戸港周辺を回つてみた。明るい日ざしを浴びた集中配船期の突堤はどこも内外の貨物船でぎつりつまり、ミナトはどこも活気があふれていた。カモメを追つて防波堤の外に出たときに、初めて進徳丸の姿が視界にとびこんできた。近寄つて育ててきた。

造された。終戦直前に二見沖で米軍機の空襲を受けて危く沈没しかかったが、その時も、この進徳丸は不死鳥のように立上がり、これまでに三千数百人にのぼる船乗りを育ててきた。

ひどつ、第六関門沖に仮泊したまま、もう五ヶ月も動かない船がある。

てみた。白かつた船体はすっかり古ぼけてねずみ色に変り、赤いきつ水までがだらしなく波にあらわれている。

三十九年の船齢ではむりもないが、何といつても紅顔の「海の男」たちの姿が甲板にみえないのがさびしい。

長い冬が終つても、まだじつと動かない進徳丸は、「老醜」ということばさえ連想させて、あわれだつた。神戸高等商船学校を出たY船長は「これで私は初めてハワイに行つたんだ」とボソリといった。みると、潮風にやけた船長の顔は、妙にこわばつていて。

昨年暮れ、運輸省は、進徳丸を廃船処分にしたが、ゆかり深い神戸市が昨年末にこれを払い下げてもらった。須磨海岸に固定させて青少年ホームに利用しようというのが市のねらいだが、まだ改造費のメドがつかず、港外に放置したままというわけ——。市は「決してほおりつ放しにしてるワケじゃない」というが、まだ予算化の準備はできていない様子。須磨海浜公園の人気ものになるまでは、まだ大分時間がかかることだろう。

（新聞記者）



紳士服飾・婦人服飾  
**セリザワ**

紳士服飾//大丸 前 (3) 38900  
婦人服飾//大丸 前 (3) 1695  
婦人服飾//三宮センター街 (3) 6114  
婦人服飾//姫路やまとやしき(23) 1221



K O B E のセンスで選んだ  
美しいアクセサリーのかずかず

芸 げい む 夢

コスチュームアクセサリー  
神戸店 / トアロード (3) 8643・2293  
大阪店 / 心斎橋ロビー (211) 5153・1044  
心斎橋名店街(小大丸ビル) 211-8503

# 既製服を着る

福 富 芳 美



5月、青く澄みきった空、緑の山へ、そして街へと、じつとしていられないさわやかな季節です。初夏の装いを若さで謳歌するのも今が一番ではないかと思ひます。最近は既製服も随分と種類があえ、若い人達の着る楽しみ、買ひ楽しみが十分味わえるようになります。既製服にはオーダーとは違ったよさがあるのです。オーダーは出来上る迄の順序をしっかりと身に合うよう仮縫いをし、着る人のからだに合せて作るのですが、既製服は出来上ったものをからだに合せなければなりません。だからいとと思って買ひ求め、家え持つて帰つて身につけてみて、こんな筈ではと自分の買物に後悔されるようなことはないでしようか。既製服をお買ひ求めになる時のアドバイスをいたしましよう。

神戸はシャレたセンスを持った人が多いと言われていますが、神戸には神戸のセンスを持った商人がシャレた洗練された商品を店々に飾つてゐるのですから、素晴らしいと思います。まず、色とデザインをよく見ることが大切です。

デザインは着ることと活動しやすいことを考えて選ぶことが大切です。それには組合せに便利でアクセントのつけやすいセパレーツなどがいいでしよう。又、ひとつしづらしか着用出来ないようなデザインはさけるように

したいものです。面白いもの、大胆なものをどうしても着てみたいと思われる人はリゾート的なねらいで着て下さい。普段着はいつも品よくきるということです。

買ひ求める、その一瞬にその人のセンスがベスト・ドレスナーであるか、どうかがわかります。

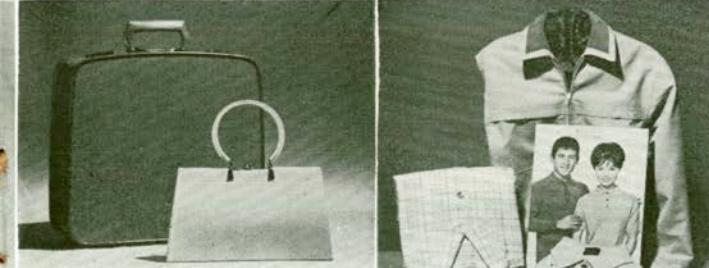
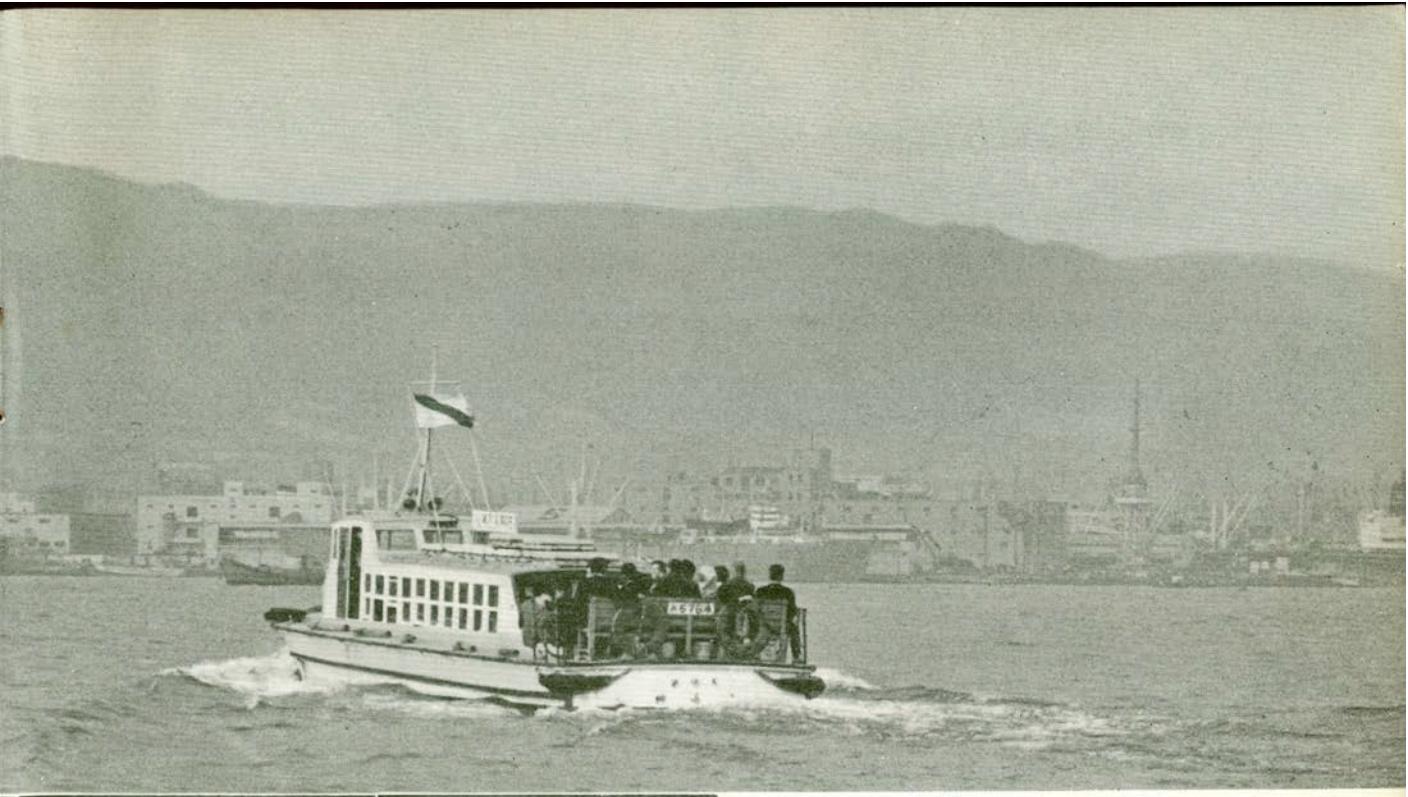
気に入つたら、次にもう一つ大切なことは仕立を見るということ。たとえ、どんなに色やデザインが素晴らしいとも、仕立が粗雑では既製服としての値打は半減します。仕立かたのこまかい部分迄、注意しましよう。仕立たする場合はどうだろうか、むやみにフリルやシシリウクのあるものは、案外、見かけは素晴らしいとも洗たくの時に困るということがよくあるものです。アイロンするときはどおだらうか、など忘れないで調べて下さい。

色、デザイン、仕立。その次は、商品を着てみましょう。お店の方はあまりいい顔はしないでしようが、ちょっとした心のくばりがお買得に結びつくと思えばなんでもないことではありませんか。軽卒に早まつた気持でお買物をしますと既製服ならずとも、どんなお買物にも損なのですから……。

最近、話題になつてゐる、ブレタ・ポルテというのはこれはフランス語で、高級既製服と言つて、日本でも、さかんにとり入れられています。一部の繊維メーカーとデパートがパリの一流デザイナーのパターンなどで、日本の生地を使い、日本で作つた作品を売り出そうとしている段階ではオーダー並のようですが、そおして作られたブレタ・ポルテが我々の体に合つるのはまだ遠いようです。お値段もなかなか高級で、今段階ではオーダー並のよう……。

将来は我々にマッチしたシャレたブレタ・ポルテが必ず誕生するでしよう。

既製服は買ひ求め、すぐに着られるのが魅力。安値だといって飛びつかず、信用出来るメーカー品を選ぶことが必要です。既製服をきこなせる、それは若い人たち丈の特權ではないでしようか。(神戸ドレスメーカー女学院長・大丸神戸店顧問デザイナー) ||談



あらゆる鞄の専門店

**大上鞄店**

元町1 ⑧3962~3964

流行のトップを知らせする  
メンズショップ

**千秋堂**

元町4丁目④6959

すばらしい神戸の観光ライン  
一六甲山・須磨・神戸港一  
お買物は美しい  
神戸のトップショップで  
お楽しみ下さい。



初夏の装いのお仕度を  
秀品店友の会加盟店

**トーレイ洋装店**

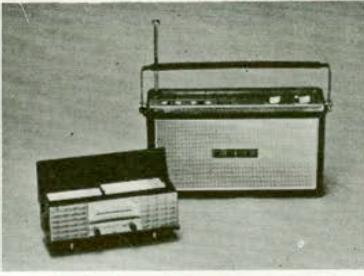
新聞会館1館 ②2818



男子洋品の店

**フナキヤ**

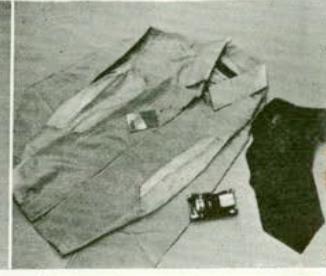
元町3 ③3617



あらゆる電器製品の店

**元町電機**

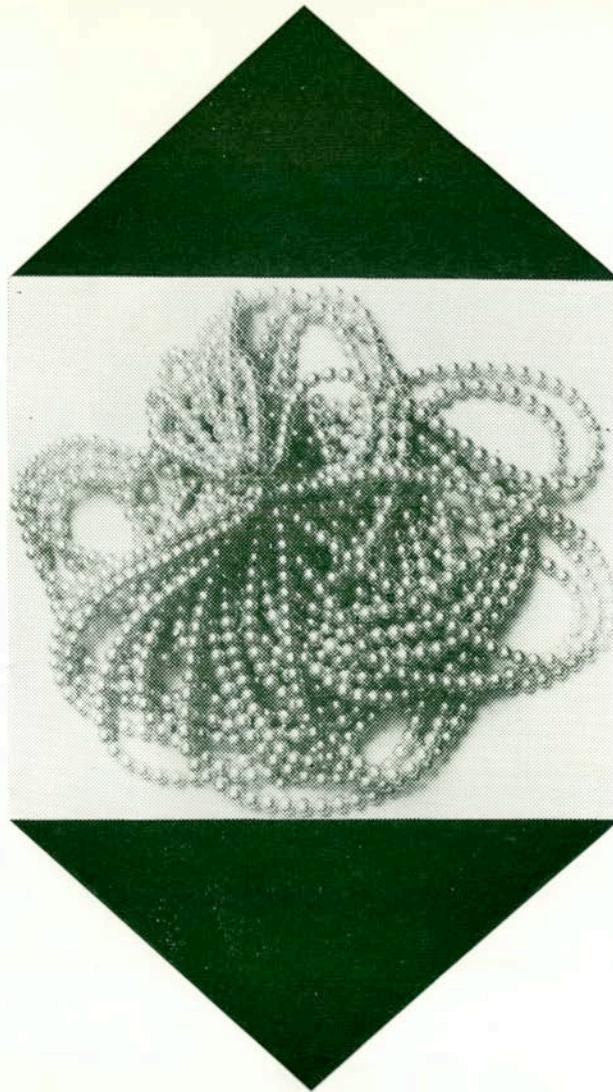
元町6 ④3701~5



紳士洋品の店

**サカエ**

元町2 ③5122



## 斯界の代表タサキパール

ネックレス、リング、ブローチ  
真珠装身具一切

**T.P.** 養殖加工 **田崎真珠**  
K.K. 輸出販売  
取締役社長田崎俊作

本社 神戸市兵庫区旗塚通6丁目9番地 TEL.神戸(23)3321-3  
東京店 東京都銀座西6丁目5番地(並木通) TEL.東京(572)2655  
神戸店 三ノ宮駅前神戸新聞会館秀品店内 TEL.神戸(225)6-4-6